

書籍紹介『自己心理学入門』—コフト理論の実践—

著者 アーネスト・ウルフ(1988)

訳者 安村直己 角田豊. 金剛出版(2001)

評者 菊池秀一

まだ訪れたことのない新しい地を旅するのに地図がとても役立つように、臨床に携わるものが現場で新しい知を学び洗練させていくうえでも、そこに何らかの地図があればそれにこしたことはないだろう。評者は大学の現場で学生相談を担当して約10年になるが、その歩みを振り返ったとき、その地(知) 図となった書籍のひとつを挙げるとすればそれは本書『自己心理学入門』であることは確かなことである。

本書との出会いは、評者が大学院に入学する前の院入試の勉強をしているころであったと思う。当時、とりわけ精神分析理論に精通していたわけでもなかった評者にとって、第1部の『自己の心理学』における丁寧な具体例を交えたとてもわかりやすい基礎概念の説明の数々は、読み進めていて無理がなく、まだ駆け出しであった評者の自尊心を少なからず強めてくれたように思われる。

例えば、自己心理学の重要概念のひとつである自己対象について、本書では「もっとも多い誤解は、自己対象を人物のことだと考えることである。確かに自己対象は、しばしば人によって果たされる。しかし自己対象とは機能なのであり、人ではないということを知っておくことは重要である。……自己対象の概念は、最初は把握することが難しいが、自己の側から見れば、自己対象とは自己を喚起し、維持し、まとまりを与えるような体験である、と極めて正確に定義することができる。」と述べられている。

上記の具体例として、音楽を学ぶ生徒と教師の関係の変遷が記載されている。その関係は、最初、音楽の技術を学ぶのに生徒は教師を利用するという単に技術の獲得のためだけにもたらされた対人関係であるが、その後、関与する二者の一方または双方が自己を支えるのに必要な自己対象を求めて相手に依存するようになると、その関係が自己の構造とまとまりを維持するために機能する、自己対象体験に置き換わることがわかりやすく説明されている。

また、自己心理学の基本概念といえる共感への概念説明も極めてシンプルである。コフトの共感についての説明は、初期と晩年では変遷があったことが知られている。著者はその意義を“精神分析(深層心理学)を特徴づける機能”、“加工処理機能”(精神分析に特有のデータを得る機能、より具体的には他人の内的体験への接近は不確かなものであり、それを考えるためには、精神分析家は想像力を駆使して相手の体験の中に身をおくという代理の内省によってそれを感じる必要があることに関わる機能)、そして“自己を支える機能”(共感的に話を聴き、代理内省を通して波長を合わせることで、被分析者からデータを収集する精神分析家は、同時に、この傾聴という行動によって被

分析者の自己の凝集性を強め、自己評価と幸福感を高めることに関わる機能) という3つの機能によって、わかりやすく解説している。この3つの機能が自己心理学のまさに中核であり、理論と実践の土台であることはいうまでもないであろう。

それから、本書第1部の第6章に記載されているグループ自己の概念と自己愛憤怒の関係についての考察は注目に値する。著者はかつてコフトが提唱したこの概念について、組織化され、まとまりをもった個人に類比させて、まとまりをもったグループはひとつのグループ自己をもっていると想定し、両者の関係について次のように述べている。「……グループ自己の自己愛的な傷つきやすさと怒りの問題に答えることは容易ではない。しかし脅しや弱体化をもくろんだ策略は、相手の自己の無力感とそれによって引き起こされる自己愛憤怒を必然的に増幅させる。屈服による平和ではない、相互の共感的な理解による真の平和とは、敵の自己を弱めることではなく、強めることから生まれてくるという一見逆説的な示唆がわれわれに与えられているのである。」

この著者の指摘は、今日特に欧米で顕在化している宗教上の過激派(テロリズム)の存在(集団化)とそれへの対抗策(各国による空爆等)との関連や、ポピュリズムに彩られた排外主義の蔓延化を考慮すると、現代の国際社会の情勢を捉えるうえでの重要な視座を、自己心理学の専門性が着実に提供し続けていると判断できるのである。

ここまで第1部について記載したが、本書の第2部の『治療』についても紹介したい。評者は学生相談という業務上、個室としてどのような部屋が望ましいだろうかと、特に中立性との兼ね合いやソファの構成等についても検討を重ねた経験がある。本書はそのような現場での疑問の説明についても、極めて明快に記載されている。

例えば前者については、「……その場所は静かで快適で、また豪華でも殺風景でもないような場所であるべきである。分析的な中立性のために、無菌の実験室のようである必要はない。分析者は、自分のスタイルや趣味や個人的な好みを出さないでいることはできない。」と述べられている。また、後者については、「自己心理学的な方向づけをもった分析者は、限界はあるにしても、退行を促進させていく集中的な臨床作業である精神分析を行う場合でさえ、カウチを使わないことが多い。また心理療法を行う際や、あえて退行を促進させない場合には、対面法を使うというのが一般的な原則になっている。」と指摘されている。これらの現場に関わる具体的な指摘は、(カウチの有無の必要性の検討も含めて)評者にはとてもありがたかった。

また、本書の第9章『治療プロセス』は、自己心理学的な臨床実践を理解するうえで、必読であるといえる。評者は修士2年の夏休みに、コフトの3部作を3回通読した経験がある。当然ながら、その経験から自己心理学の多くを学んだのであるが、その中でも初期の作品である『自己の分析』は特に難解であり、(3部作を通じて循環的に解釈すれば)1冊の著書としては自己愛という現象に対する限定的でありながらも体系的で臨床上の示唆に溢れるとても魅力的な書物でありながら、それと同時に苦し紛れの未成品といった印象が評者の心には強く残っていた。まさに‘自己愛に関するコフトの

考察の最高点’でありながら‘『自己の分析』の文体は、明らかに人を困惑させる’（ストロジヤー [Strozier] ,2001）一面が存在するといえる。

私見では、コフートは晩年の『自己の治癒』において、再度自身の創始した自己心理学の臨床上のプロセスを、できる限りなんとか概略化しようと試みていたのではないかと推察している。例えば、『自己の治癒』の第2章の中で、コフートは全体としてのエディプス経験の基本的意義を再評価するように促す決定的な転移連鎖の図式化を行っている。そして、その図式化は、文章構成上においてはまだ短い序章に過ぎなかったという印象を評者は持っている。また、同じく『自己の治癒』に記載されている最適の欲求不満における三段階の過程の見解がもたらすそのより広範な視座は、彼の創始した自己の臨床理論にさらなる深みを与えている。あえて表現すれば、これらの論旨はフロイトが晩年に『精神分析学概説』において試みた総括の仕事に近かったのかもしれない。

本書第9章の断絶—修復プロセスでは、抵抗分析、転移の動員、転移の断絶、転移性退行、そして転移の修復というプロセスについて、段階的に極めて詳細な説明がなされている。このプロセスの説明は、前述のコフートの概略化の展開（明確化）を感じさせるものがある。また、読者は、本書第12章『分析における現実』において、間主観性の議論も含めた三つの現実について、著者のさらに洗練された心理的变化に関する理論化をまのあたりにすることになる。

すでに本書は、自己心理学の文献においては古典に位置すると思われる。しかしながら、時に古典 (classic) には一流 (classic) の風格を感じさせることがある。その意味で本書は、精神分析的自己心理学における最高水準の作品のひとつであると評者には思えてならない。

文献

1. Freud, S. (1940) .An outline of psychoanalysis. SE, 23. /小此木啓吾訳 (1983) .『精神分析学概説』フロイト著作集9巻 人文書院.
2. 北山修監訳・編集 (2005) .『フロイト全著作解説』人文書院.
3. Kohut, H. (1971).The Analysis of the Self . International University Press . /水野信義・笠原嘉監訳(1995).『自己の分析』みすず書房.
4. Kohut, H. (1977).The Restoration of the Self . University of Chicago Press . /本城秀次・笠原嘉監訳(1995).『自己の修復』みすず書房.
5. Kohut, H. (1984).How does analysis cure ? University of Chicago Press. /本城秀次・笠原嘉 監訳(1995).『自己の治癒』みすず書房.
6. Lee, R. & Martin, J. (1991). PSYCHOTHERAPY AFTER KOHUT. /竹友安彦・堀史郎監訳 (1993).『自己心理学精神療法』岩崎学術出版社.
7. Ornstein, P. H. (1978).The search for the self — Selected writings of Heinz Kohut: 1950—1978 Volume 1. /伊藤洸監訳 (1987) .『コフート入門 自己の探求』岩

崎学術出版社.

8. Strozier, C. B. (2001) Heinz Kohut: The making of a psychoanalyst. Farrar, Straus and Giroux/羽下大信 富樫公一 富樫真子訳 (2011) . 『ハインツ・コフート その生涯と自己心理学』金剛出版.

※本原稿は2016年2月に日本精神分析的自己心理学協会日本精神分析的自己心理学研究グループに筆者が寄稿した原稿に改訂を加えたものです。